

## 「幼児のための療育セミナー」報告

# 療育施設での療育の実際と子どもの成長

杉 浦 司

現在、名古屋市内に5カ所地域療育センターがあるが、私のいる南部と東部地域療育センターは同じ社会福祉法人が運営している民間の地域療育センターになる。北部、西部、中央の3カ所は公立の地域療育センターになるが、私たちの法人も名古屋市からの事業委託を受けているので、名古屋市内の地域療育センターとして事業をさせていただいている。私は南部療育センターそよ風で、療育グループ指導員をしている。

今回は親子教室（通称、療育グループ）についてや、児童発達支援センター（通称、通園）へ療育グループからつながっていく子どものケースや、通園の中でどのような療育をしているかということについてお話す。

### 1. 療育グループとは

まず、療育グループは、主に0歳から2歳までの就園前、就園する前の子どもたちの親子で通う療育教室である。0から2歳とはなっているが、まれに3歳児なども来ている。

そよ風は南区と緑区が管轄のエリアになっている。港区は公立の西部地域療育センターが管轄になるが、バス1本でそよ風に来られるエリアがあって、こちらのほうに弾力運用という形で一部港区も管轄エリアになっている。

主にどんなお子さんがつながってくるかというと、基本的には保健所での1歳半健診や3歳児健診で、保健師さんにこの子は気になるなというふうに見てもらって、つながってくるのが一番多い。あとは、保護者のほうから自発相談で、保健

所のほうに、言葉の遅れの心配や、多動気味で動きが気になるということなどで相談があって、保健師さんが療育センターを紹介してつながってくるパターンもある。直接お母さん自身で療育センターというのを調べて、直接問い合わせにつながってくるケースも最近はわりと多い。

### 〈グループ編成〉

療育グループは、そよ風としては南区で1カ所、緑区2カ所で行っている。もともと緑区の保健所の近くに1つ拠点があって、そこと南区では毎日午前中に療育グループを開催している。緑区は広くて最近、お子さんの転入や出生もすごく増えているので、桜通線の徳重駅の近くにも1つ拠点を設けて、そちらでも、週1回、療育グループを行っている。

0から2歳児の未歩行児のグループは、毎週、南区のそよ風があるところでだけでやっている。CP（脳性麻痺）、てんかん、ダウン性というような子どもが通ってきている。毎年20名ぐらいの登録になるが、最近、運動発達遅滞（MD）でつながってきていて、1歳とか2歳と年齢が上がってくると、自閉の傾向がはっきりしてくる子や、もともとつながってくる時点でもASD（自閉症スペクトラム）の傾向があるような子どもが多い。2歳、3歳になってくると顕著になってくるような子どもが、グループに3、4人ぐらいいる。こういった子どもはいずれ歩くようになっていくので、年齢が上がってきたところとか、ちょうど新しいグループが立ち上がる時期には、保護者と相談して、2歳児の就園前グループなど、より本人に

合うようなグループに参加ができるよう促していく。未歩行児のグループでは、最近重複障害などが多くて、ダウン症のお子さんでも、結構 ASD の診断もつくような場合もあるので、もともと生まれたときから持っている疾患だけではなくて、その後成長する過程での ASD 傾向などで、子育ての中でお母さんが困ることへのタイムリーなフォローが要ることを日々実感している。

**0・1歳児の就園前グループ**は、1歳半健診でつながってきているような低年齢児のグループで、月2回、隔週で2グループ行っている。こちらは、第1子のお子さんもすごく多くて、お母さん自身がまだ子育てに不慣れで、育てにくさもあったりして、子育ての負担感やしんどさも大きい方が結構来ている。お子さんにとっても負担がそんなに多くないような回数でやっている。

**2歳児(3歳児)の就園前グループ**は一番参加人数が多く、毎週午前中に行っている。こちらは1グループ15人くらいである。年々増えているのは、お母さんが仕事をされていて、既に保育園に入って、並行グループというような形で通ってくる方も、各グループに2、3人くらいはいるようになってきた。

### 〈療育グループの日課〉

グループの日課の大体の流れは、下記のようなものである。

- 9:45 登室・手洗い・荷物出し、自由遊び
- 10:30 おはようのつどい  
呼名・手遊び・親子遊び
- 10:45 取り組み(主活動)  
新聞紙遊び・粘土遊び・水遊び・遠足
- 11:05 おやつ(おせんべい・果物・おにぎり)
- 11:15 絵本、さようなら
- 11:20 必要に応じて個人懇談

9時45分くらいに来て、11時、遅くても11時半くらいには終わる。トータル1時間半くらいの療育グループを実施している。9時45分から10時半までの時間で、通ってこられているお母さんとスタッフのほうでお話をさせていただいている。

15～16組に対してスタッフ4人くらいで入っていることがほとんどなので、年度末ぐらいだと1人4人くらい担当になるので、4人のお母さんと順番に10～15分ずつぐらいお話をしていく。途中で就園のことを決めたり、初診の予約を入れる時期にはすごくお母さんたちは悩まれるので、必要に応じて個人懇談というような形で、グループ終了後に1時間ぐらい時間をとってゆっくりお話をさせていただいている。

つどいがトータル15分ぐらいで、手遊びをしたり、一人一人名前を呼んだり、親子遊びを中心に行っている。その後、みんなで排せつに行く。南区のほうは施設をきれいにしたので、小児用の便座が幼稚園みたいにあたり、おまるも8個ぐらいあるので、みんなで順番におまるに座ってみたり、できる子は立ち便器でやってみたりしている。トイレトレーニングを全然家でやっていない子どももいるので、そういう方はまずトイレでみんながやっているところを見に行くところから経験してもらっている。お母さんたちが全部介助してしまっていて、なかなか自分で身辺自立に向かわないお子さんたちも結構いるので、(4月から幼稚園・保育園に行く子も多いので)自分でズボンをおろすというところから、お子さんの状況に合わせて、身辺自立もお母さんにも意識してやってもらえるようにかかわっている。

**主活動**は長くて20分ぐらいで、新聞紙遊びや粘土遊びをしたり、屋上に大きいビニールプールを張って、遮光ネットを張って、みんなで水遊びをしたりしている。地域療育センターはリハビリで使ったりもするので温水のプールが併設になっており、そよ風にもプールがあるので、肩までつかるプールにお母さんとお子さんで入ったりしている。

**遊び**についてだが、粘土遊びは、今まで小麦粉に食紅をまぜて練って、きれいな色に着色して粘土遊びをすることも多かったが、最近は小麦の粉を吸うだけでもアレルギーが出てしまう子も結構いる。それで、小麦粉をやめて米粉で、もちもち、しっとりした感じの粘土になるので、粉から

お母さんと一緒に粘土をつくる感触遊びをしたりする。感触が苦手な子もすごく多いので、月4回は同じ遊びをして、最初はだめだったけど4回目ですと触れたねとか、3回目くらいから、固まっちゃうと嫌だけど粉なら大丈夫とか、お子さん一人一人の受けとめられる過程というのをお母さんと一緒に見ながら遊んでいる。

遠足も行っている。お父さんやおじいちゃん、おばあちゃんもお誘いして、アスレチックとか動物もいるような東海市の大きい公園にもみんなで行っている。4月と秋にその公園に行くが、4月のときには全然遊具で遊べなかったけど、また半年ぐらいたって遊具で遊べるようになってきたとか、動物に興味が出てきたとか、家族でそういうお子さんの成長を喜び合えるといいなと思って、毎年企画している。わりと参加率がよくて、遠足は大所帯で、ブルーシートの大きいのを4枚くらい敷いて、みんなですつどいをしている。

おやつも粘土と一緒に、最近すごく気を使わないと、お子さんに合わせていくことが難しいと感じている。市販のおやつをあげたことがありませんというお母さんが結構多くて、バナナ、桃、マンゴーとかもアレルギーがある子がいたりするので、市販もだめで果物もだめというのを何を出そうかなということになる。わりと果物が大丈夫だというグループはバナナやスイカを出したりしている。夏場は暑くて水分がとれない子もいるので、100%のリンゴジュースに寒天をまぜて、寒天ゼリーを朝一生懸命仕込んで、それをおやつに出したりしている。

11月頃に、就園を控えたグループは、みんな食事と一緒に経験できるといいので、遠足前後におにぎりを家から持ってきてもらって、近くの公園に行ってそのおにぎりをみんなで食べるとか、キッチンで汁物を一品つくって、ご飯だけ炊いて、みんなで一緒に食べて帰るといったような取り組みをしたり（予算の関係上ずっととはできないが）、少しずつ、大きな集団に通う前に友達と経験していくということも大事にしている。

### 〈療育グループの中で大切にしていること〉

療育グループの中では、子どもにとっては、**集団で遊びや、友達とのやりとりなどの経験を広げ**ることを大切にしている。好きな遊びはもちろん広げてほしいが、苦手な遊びがわかるということも大事だと思っている。苦手な遊びに対してどう気持ちを向けていくかということや、できていく過程でどういにかかわりがあったら受けとめられるかなど、日々通ってきてもらう中で、今日はこれでよかったよねとか、お母さんと一致できることも大切にしている。グループはとにかく親子が基本で、単独で預かりということはしていない。お子さんの中にはまだまだ二項関係がやっとなという子もいるので、**触れ合い遊びなど、親子で一緒に遊びを楽しむ**ということを大事にしてほしいと思っている。また、**就園の前に、日課のある生活に慣れる**ということを経験してもらえるとよい。

幼稚園のプレや、地域の幼児教室、大型商業店舗の中に入っているような教室などにも別の曜日に行っている方も、たくさんいらっしゃる。プレだと親子が20～30組いたり、幼児教室だと単独で預かってもらえるところが多いようだが、そういうところとは違う、親子で来てもらうということを大事にしたいと思っている。ほかのお母さんとしゃべりたかったり情報を交換したいという思いもすごくあると思うが、やっぱりお子さんと一緒にやってもらうことでお子さんの特性をつかんでもらいたいと思うので、お母さんたちのおしゃべりする時間も後で保障しながら、遊ぶときは一緒にやっとなと声かけをしたりしている。

**子どもの理解を深めていく**ことも大事にしている。今捉えているよりもさらに、こういうところがあつたんだということは気づいてほしいなと思っているし、一緒にやってみることで何がよかったのかとか、何が苦手かということを知ってもらうことも大事である。お母さんが遊び方がわからなかったり、お子さんに合う遊びがわからないという方も結構いるので、こうなら楽しめるんだとか、そうやって遊べばいいんだとか、遊び方を知ってもらうのも大事だと思っている。

もちろん他の親たちともつながることも大事である。地域のお母さんとか幼稚園のプレと一緒に通っているママにはなかなか相談できないというようなこともあったりして、グループのママだったら話せるわというお母さんも結構いらっしやるので、なかなかみんなに話にくい話、お子さんの育ちの弱や育てにくさみたいなどを共有してもらえるといいと思っている。

### 〈療育グループの役割〉

療育グループの役割としては、まずは相談しようと思ってそよ風につながってきてくれているので、主訴：何が心配で来ているかとか、どこが育てにくいかはまず丁寧に聞くようにしている。やはり一番多いのは言葉が出てこないとか、言葉の遅れということだが、家で遊び方が広がらなくて扉のあけ閉めばかりになってしまうとか、常同行動ばかりですとか、爪先歩きってやっぱり自閉症ですかねとか、ダイレクトに障害かと聞いてくるお母さんもみえる。乱暴、他の子に被害を与えてしまったり、痲癩も1時間も2時間も泣かれてしまうと大変なので、そこにどういうフォローがあったらいいかとか、どういうふうにかかわればちょっと落ちつけるかなども、タイムリーに返せていくのが一番いいのだが、集団での様子もこちらから伝えながら、保護者の捉え方と一致させていくところを大事にできるのがグループのよさである。

集団でのお子さんの様子を毎週丁寧に捉えながら、お母さんの心配なことやおうちでの心配事なども丁寧に聞きながら、話をする。お母さんも、言葉だけなのでそんなに相談することはありません、行ったほうがいいよと言われたから来ていますというようなスタンスの方も結構いるが、心配はされて来ているとは思っている。なので、お子さんがいずれ大きな集団に行かれるときに、どこが心配になって、どういうフォローがあると園でも過ごしやすいかというところを伝えていく。

療育グループの中でこういうところを大事にしてこの活動をしているということはその都度保護

者に伝えている。ただ集団に入ればいいのだったら、子育て支援センターでやっているようなグループでもいいし、単独で行けるようなところでも、保護者が通いやすいところに通ってもらえればいいと思うが、わざわざ親にも足を運んで来てもらっているのだから、グループ(集団)に参加することの意味を伝えることは大事だと思っている。

就園指導というのとでもおこがましくて、こちらからお教えするみたいにとってもらうと大変な言葉だなとは思いますが(職員の通称上、就園指導と呼んでいる)、指導というよりは、お子さん本人により合った園を選んでいくことを一緒に相談していく。就園についてはやはり保護者が一番悩むところである。私たちも一応地域の園に巡回などで行かせていただくこともあるので、どういう園か少しは様子がわかるので、その子にとって合う園を選んでいるか、相談があればお話しする。

初診の勧奨：初診というのは、発達検査やドクターの診察がセットになっている診察のことなのだが、必要があればそういった初診の予約も勧めていく。グループに参加する前に初診の予約をとっている方もいるが、基本的には先に集団のほうに参加してもらって、保護者がやっぱり診察を受けたいと思ったときに予約をとってもらうのが一番いいと思う。また、そよ風も初診の予約をすると2カ月半から3カ月ぐらい待ちがあるので、タイムリーに聞きたいときに相談できないという事情もある。したがって私たちも、就園を考え始めるのが10月だったら、3カ月前の7月ぐらいにはもう話をしておいたほうがいいのかと逆算して、就園の前に一度診察してもらって、お子さんの発達のでこぼみみたいところを見ておくといいいのではないかというお話をさせてもらっている。

### 〈子どもの状況に合わせて〉

療育グループでは、子どもの状況に合わせてどういう援助があったら活動に参加できるかとか、日々お母さんと話をしながらかかわっているが、つどいや主活動のときに困るケースがとても

多い。多動で、みんなで集まるとうれしくなって余計に体が動いてしまう子もいるので、体ごと制止してあげたほうが落ちつけてリーダーの職員のほうに注目ができるとか、抱きかかえて床にどんどん刺激を入れてあげるとちょっと落ちつくという子もいる。その子その子に合わせて、つどの前にちょっと感覚で楽しい好きなことをやってから、苦手なつどいに参加してみるようにしたり、こういうタイプの子はこういう刺激が好きだよねとか、職員もその都度感じて動いている。

過敏性のある子ども、例えば、グループの教室に入れなくて、ずっと外で帰る帰ると言って泣いていた子どもで、車でそよ風に来る道、右に曲がるともう泣き始めてしまう子もいた。まずはお母さんと安心して来てもらえるように、外に1人の職員がついて、お母さんの話も聞きながら、おやつで誘って入れたら、泣いただけで終わらずおやつは食べられたという場合もある。何か1つできたことを経験して帰ってもらえるといいので、お母さんと相談しながら本人が入れるきっかけみたいなものも探ったりしている。

また、他害のある子どもだと、お母さんもやっぱりその子を叱って、周りにも謝ってばかりでほんとうにつらい、外に遊びに行くのもすごく大変、しんどいですと言う。おもちゃをとっちゃったときには、やりたかったんだよね、でも返してあげようみたいに、気持ちを代弁してあげること、子どもさんの痾癪や他害が落ちつくこともあるが、ふだん私たちが自然にやっていることを、意外とお母さんたちは家でやっていなかったりすることも結構ある。ちょっと気持ちを言語化してあげたらと言うと、家でやってみて、少し子どもが落ちついたりすることもあり、日々それぞれタイムリーな困り事に、手だてがないかを一緒に考えたりしている。

#### 〈他の教室との違い〉

子どもが単独で通う幼児教室だと、子どもは集団経験もできて、お母さんたちはちょっとお茶できたり、レスパイトの意味も含めて通っているお

母さんもいらっしゃる。幼稚園のプレ教室だとまだ集団が大きいので、療育グループみたいな小集団のほうが子どもが慣れやすいということもあるかと思う。

今、たくさん児童発達支援事業所も各地にできている。いわゆる児童デイサービスという事業所だと1日に利用の定員が決まっていたりするので、わりと毎日いろんなお子さんが来るところも多いかと思われる。その中で個別の音楽療法とかやってくれたり、ちょっと訓練的なことをやってくれているような事業所もあったりするので、それはそれでお母さんたちのニーズに合っていたり、集団ではない個別の療育をすることでお子さんが力をつけていくということも大事にしていっていいのではないかとは思っている。しかし、療育グループはそういうカラーのある事業所とは違って、親子で通うというのが軸なので、そこをお母さんとお子さんの特性の捉え方を一致させたり、個別の支援を一緒に考えていくということをしていく。

お母さんが、こうしたら変わったとか、変わらないのであればどうして変わらないかなどを一緒に見て知るといふこととか、繰り返しやってきたことを通じて、その子が何か課題ができるようになったり、乗り越えられたような経験もお母さんも一緒に見てもらうことが大事だと思っている。

#### 〈就園指導〉

就園先を全然決めていませんというお母さんの場合は、おそらく子どもさんに合うのではないかという集団を提案していく。もちろんお母さんの就労の有無、育休中でまた復帰するとか、家庭の状況に合わせて、幼稚園がいいんじゃないとか、保育園がいいんじゃないとか、こども園がいいんじゃないとか、お母さんも大体目星をつけていたりする方も多いので、こういう場はどうかという話をしたりすることも多い。

既に就園先を決めている場合はすごく多いが、一番近い幼稚園に決めていますとか、働く予定なので希望（名古屋市は6カ園希望が出せる）は6

カ園ここに決めていますとか、まだ一切見学も行ってないけど決めていますという場合もある。子どもに合っているようであれば、そこの幼稚園でプレ教室があればプレとかも行ってみたらとか、保育園とかだと遊ぼう会とかに行ってしまう雰囲気です。保育をしているか見てきたらということをお話ししている。ただ、お母さんは幼稚園が絶対いいと思っているけど、お子さんにとってはより少ない集団のほうがいいのではないとか、私たちの捉えと少しずれているなというような場合もあり（合っていないと勝手にこっちが思っているだけかもしれないが）、保護者はやらせたい保育やプログラムがあるので決めているということもある。なので、合っていないなとこちらも思った場合は、失礼ながら、プレの人数は多くてギャーギャー泣いているけど、今グループだと泣かずに来られているよねとか、そういう集団での様子も説明しながら、もうちょっと小さい集団の園にしたらとか、幼稚園でも、担任1人に対してどれぐらいの人数でクラスを見ているのかとか、そこに主任の先生とかがフリーで、加配で入ってくれる人がいるのかとか、そういうところもお母さんから聞き取りながら話をします。あとは、おうちが自営業とか、内職している場合、保育園はどうかとか、公立の保育園だと発達の援助枠というのがないので、そういう援助枠で保育園に申し込むのはどうかというようなお話をさせてもらっている。

**通園を勧奨する場合**—そよ風は児童発達支援センターなので、そういう園に行くのはどうかということもお話しさせてもらう場合がある。通園に行くということは、幼稚園や保育園を選ばずに通園を選ぶということなので、お母さんたちにとっては決めるのに勇気が要る場合もすごく多いと思うが、集団の様子やお子さんのふだんの様子なども聞かせてもらいながら、通園が合うのではないかなということも少しずつお話をさせてもらっている。苦手なところやでこぼしたところだけでなく、少し遅れがあったりする場合も多いので、集団の様子だけではなくて、実際に個別

の発達検査をしてもらって、ドクターにも診察してもらって、その結果を踏まえて選んでいけるように初診につないでいくということをグループの中で勧めている。初診の結果、実際診断がついたという方もいるし、保護者にはきちんとした診断名で伝わってなくて、発達の遅れということだったり、ASDの傾向ということだけで伝わっている場合も多いが、そういう結果をふまえて、子どもにとって必要な保育の質ということについて懇談したりしている。

その際、通園見学ということで、実際に通園の療育を見てもらって決めてもらっている。一応通園は希望すれば入れるということにはなっている。最近、検査の結果、発達指数的にはわりと遅れはないというお子さんだけれども、やっぱり痲癢や他害とかがあって、お母さんが地域の園に行く勇気がなくて通園に行きたいというような方もいらっしゃる。そういう場合も本人に合うかどうかをやはり検討していくことも必要で、実はモデルになるような子がいる地域の園のほうがその子が伸びていくんじゃないとか、他害も友達とのやりとりの中で出てくることも多いので、そういうやりとりをベースに力をつけていこうと思うと、もうちょっといろんな友達がいるような地域の園がいいのではないとか、そういうこともお母さんと話しながら、通園にほんとうに通えるかということも検討しながら進めている。

そよ風の通園施設は通園当初は母子通園になっているのと、毎週水曜日が親子登園になっているので、実際お母さんが園に足を運ぶことがものすごく多いので、母子で通えるか、家庭環境も含めて通園が合うかどうか検討して、選べるようにお話しさせてもらっている。

**通園につながるケース**—実際グループの中でどんなお子さんが通園につながるかということ、やはり未歩行児グループのように、体に疾患があったり、健康状況が不安定という子は、そよ風だと看護師さんもドクターも常駐しているので、急な診察にも対応できるので（もちろん保育園に行かれる方もいるとは思いますが）、通園を選んで、健康状

況の捉えもしながら通われる方が多い。発達にでこぼこがある場合は、遅れはあまりないけど、すごく過敏でなかなか集団に入れなとか、多動でその場にいられないことも多いとか、教室や園庭から出ていったりするような危険があったり、感覚の過敏があるような子どももいる。興味の偏りがあって、好きな遊び、嫌いな遊びがすごくはっきりしていて、活動に参加するに当たっては援助があったほうがいいのかというような子ども。あとは、過度の偏食があり、なかなか保育園や幼稚園の給食も食べられないという子もいる。健康状況や知的には問題がないけど、過敏でご飯が食べられなくて鼻からチューブで注入しているという子も前にいたが、そういう子で通園につながってくるというようなケースもある。

## 2. 通園での生活

### 〈日課〉

通園での生活は、大体以下のような流れである。

9:30 登園・手洗い・荷物出し・自由遊び

10:00 おはようのつどい

呼名・手遊び（親子遊び）

11:00 手洗い・給食

12:00 午睡

14:30 水分補給・絵本・手遊び

15:00～17:00 延長保育（必要児）

現在、50人定員で6クラスあるが、1クラス8人から9人ぐらいの人数で、担任は3～4人である。そよ風では、仕事をしているお母さんもいたり、午後のご飯をつくる前後の時間帯が、3時で降園して帰宅してからがすごく大変という親御さんもいるので、延長保育ということで、1日9人定員を設けて、17時ぐらいまで預かっている。レスパイトとか、お母さんの急な受診や、家庭の状況に応じて利用してもらっている。

先ほどお話ししたように、母子で来てもらうということなので、これは新入時の日課である。年少さんになる3歳児さんは確実に入れるように調節を今までできてきているが、卒園される方と、

たまに年中さんから年長さんから地域の幼稚園や保育園に就園される子がいると、その数があきの枠になるので、希望を出された月齢順に入ってくる。

### 〈母子療育〉

一応年少さんの学年以下の人は新入児になる。新入児が4月から単独に登園するまでに移行していく流れとしては、最初4月から6月の間は週3回、母子登園をして通う。お母さんと一緒に9時から13時まで、つどいも取り組みも、給食までお母さんと一緒に過ごす。それをだんだんと3カ月の間に15時まで延ばして、部分的に取り組みだけお母さんと分離するとか、給食までお母さんと分離するとか、お昼寝の間だけお母さんたちで交流会をするとか、少しずつお昼寝に移行していきながら、お母さんたちとの分離も進めていき、徐々に給食や午睡まで時間を延ばしていく。4月から6月の間に、週3日親子登園で、平日の2日間あきの曜日があるので、どっちかで個別療育といって、2、3人で集団療育みたいにする場合もある。例えば身辺自立が苦手な子は、トイレトレーニングのやり方をお母さんとどういうふうにご家庭で環境を整えてあげるかとか、個別で本人が伸ばしたい力を伸ばすのを担任と一緒に考えていくというようなことをやっていたりする。7、8月は単独バスの登園に向けて、受け入れ時間を徐々に長くし、日数も週4～5日にしていく。もちろん未歩行児のグループは疾患を抱えている方も多いので、本人の状況に合わせて、4月も週1回母子登園で8月まで午睡まではずっとお母さんも一緒という子もおり、それぞれの健康状況にあわせてやっている。9月からは単独でバス登園になるが、だんだん完全に週5日登園という形になっていく。

週5日だが、結局は毎週水曜日は親子登園なので、お母さんは水曜日は絶対来なければいけない。しかし、いつも親子参加というのではなくて、子どもたちはいつもの保育をしていて、お母さんたちだけは学習会とか、外部の先生を呼んで学習

会をしたりして、分離をして取り組みをすることなどもしている。親子でプールに入ったり、親子で中京競馬場に遠足に行ったり、水曜日の時間にいろいろなイベントとか企画をつくってやっている。それが負担だと言われるお母さんも少なからずいる。それで、健康状況に合わせて、お子さんに合わせて日数などは、看護師さんも含めてケース会議をしながら決めている。

### 〈母子療育で大切にしていること〉

子どもにとっては、大きな集団を選ばずに通園に来ているので、まず安心して一人一人が通えるようになることが大事である。通園バスでなかなかお母さんと離れられない子もいるが、通園バスも家の前まで、ドア・ツー・ドアというのはやっぱり難しい。なので、在園している子どもたちの家の多い場所何か所かにバス停をスポット的につくっている。そのバス停にお母さんたちが送ってきてくれるが、バスに乗るときにお母さんと離れられなくて抵抗する子どももいる。ほんとうは職員がバスの外で受け取って通園バスに乗せるのだが、最初のうちだけお母さんにも乗ってもらったり、協力してもらって通園バスが回るルートをおうちの車で走ってもらったりして、子どもが安心して通うために練習を重ねるということもして、少しずつ分離していく。運転手のほかに2名保育士が乗り、バスの中も保育の時間になるので、好きな遊びをやるように職員間で打ち合わせをしておいて、安心してバスに乗れるように援助している。

子どもたちには慣れにくさがあるので、小さい集団を選んでいるということはメリットになるので、少しずつ、本人に合わせてやっていけるとよい。担任も2~3人いるので、お母さんではない他者、担任やほかのお母さんとの関係を広げていけるといいと思う。おうちでの好きな遊びを園でも担当職員が同じことをやって、園でもこんな楽しいことができるんだとか、自分の好きなことに一緒につき合ってくれるんだという経験もしてもらえるといいと思う。好きな遊びを広げ、繰り返

し同じことをどンドンして遊びこんでいくことで、まだ発語がなくて要求もなかなか出てきにくかった子どもが、上手にジュースチャーで、頂戴とか、一緒に行こうとかと言ってくれるような関係性ができてくればいい。ふわっとどこかに行ってしまうと、一緒にやろうと言っても本人の要求がなかなか出てこないという子もいるので、繰り返し繰り返しやることで、この人はこれをやってくれるみたいな関係をつくっていけるといいと思っている。

また、より丁寧な生活支援を大切にしている。身辺自立や食事のところにかかわってくるが、例えば、ASDのお子さんで白いものしか食べない子、ご飯と豆腐と牛乳とか食パンしか食べられない子がいて、でも、食パンをラスクにしたらふちが焦げ茶色になったが、その茶色は食べた。それで、白いのがちょっと茶色になるのはいいかなと言って、給食室の栄養士さんに、鳥肉でそぼろをつくってもらって、ご飯にそぼろをちょっとまぜて食べさせたら食べた。それで、豆腐に肉そぼろも入れてとか、給食室にも協力してもらって、食べられるものが4つしかなかったのが増えた。それで、おうちでも同じ味つけで肉そぼろをお母さんがつくってみたら食べられるようになった。その子は、大根の煮た茶色のものとかも食べられるようになり、ちょっとずつ食べられるものが広がってきた。このような、より丁寧な生活支援は、やはり地域の園では難しいところもあり、そういうよさが通園にはあると思う。さらに、毎日通ってくるからこそ日々試行錯誤し、模索をしながら、お母さんと一緒に考えていくことができる。

もう一つ食事の例だが、グループに来ているお子さんで豆乳と、緑黄色野菜とバナナとかを煮て、こした汁と母乳しか飲まない1歳10カ月くらいの子もがいた。ほかのものは、お母さんの失敗したソースがたくさんかかったどろどろの焼きそばはなめたというような子がいて、どうにか食べられるものを広げたいと思っていた。それ以外だと水分は、バナナ味の豆乳(甘い)ならぐびぐび飲む。お茶も少し飲むけど、水分はそれでし



かあっていなくて、やっぱり場所が変わるとほんとうに何も飲まず食わずになってしまうので、栄養もすごく心配していた。じゃ、そのバナナ豆乳で、お母さんに、パンをつくってみたらかと言ったら、ちょっとなめたりできるようになった。バナナ豆乳を寒天にしたのを出してみたりしたが、それは全然食べなかった。どうやったらそのお子さんがちょっとでも口に入れてくれるかなと、生活支援として、お母さんと一緒にできる範囲でやれることを考えていけるといいなと日々考えている。

通園施設での母子療育では、このように生活の土台づくりを大切にしている。やはり大きな集団の幼稚園や保育園に行くと、そこまで一人一人にかける時間を確保するのが難しいと思う。しかし、8人や9人の集団であれば、この先生は今この子についてトイレを頑張るねとか、給食を今頑張っているから先にみんな遊びに行ってきたねとか、そういう融通をきかせながら保育ができるので、ほんとうに一人一人のペースに合わせて、着替えや、班の食事なども土台がつかれると思う。

親にとっても、とくに3歳から5歳はすごく成長する時期だと思うので、その成長を日々一緒に感じてもらえるといいと思う。また、ほかのお母さんたちや職員と一緒に大変さ、悩みとか、子育ての大変さを共感したり、共有し合うことを大切にしている。

親子療育だからこそ、その子の持つ感性や特性や成長発達による変化、成長過程を一緒に見てももらえるといいと思っている。また、保護者会で学習を企画したりして、ほかのお母さんと一緒にお互いの障害特性を学び合うということをしている。そよ風の場合は未歩行の子もいるので、実際に歩行していてASD傾向のお子さんと脳性麻痺のお子さんのお母さんは、お互いにどういう子なのかがちっとわかりにくかったりするので、そういうのもざっくばらんに、生まれてからの育ちのことを交流し合ったりしている。

家族のイベントも多くて、親の会とか、おやじの会といってお父さんだけが集って夏祭りや、焼

きそばをつくるような会もある。家族で積極的に行事にも参加してもらって、子ども自身がどう育ってほしいとか、将来的なことを見通しながら、どうなってほしいかを家族で考えるきっかけにしてほしいと思っている。学期に1回個人懇談をするが、1回は両親懇がある。両親で懇談をして、お父さんの思いも聞く。お母さんから聞くお父さんの話ではなくて、お父さんは実際どう思っているのという話を、ちょっと腹を割って話すことも職員としたりしている。若い職員も多いので、腹を割って話すというところまでは難しいところもあるが、お父さんにも来てもらって思いを出してもらえるといいと思っている。

子ども像を考えることは、そよ風の通園部がすごく大事にしていることで、職員も子ども像を出し合って、クラスの子にどうなってほしいというような話を会議です。会議で、どういう子ども像だといいかという、それぞれの職員の思いを出し合うのだが、子どもにどうなってほしいかということを保護者にも考えてもらって、それを出してもらえるといいなと思っている。学習会とか保護者会で、また、同じ法人の通所の障害者施設に実際に見学に行ってみて、どういう就労をしているのかとか、別の作業所に見学に行ったりして、どんな大人になっていくのかということも、通園の中で考える機会を持ってもらえるようにしている。

職員にとって一子どもだけではなくて、お母さんや家族の子どもに対する思いが、だんだん4月に入園したときから就園したり卒園するまでとか、1年間の中でどんどん変わっていくので、そういう家族の変化なども職員が学んだり知るといのはすごく大事だと思っている。例えば食事のところの実践なども、この子によかったらからこういう考え方ができるんじゃないかとか、もっともっと自分の実践を次のステップに向けていけるように日々学んだり、学習会もしてはいるが、そういう機会をたくさん持てるといいと思っている。

### 3. 療育センターの役割

療育センターの役割としては、子どもの成長を喜び合うということは当然であるが、その後の就園先、就学先についても保護者と一緒に考えていく。就園してリハビリなども受けて、発達相談も継続的に来ていてという子どもも来るが、通園に来る子たちばかりが来るわけではない。保護者が子どもにとっての、ベストではないかもしれないけどベターを選ぶために、私たちが寄り添って一緒に考え、時には支えることもしながら、就学など区切りになる場面では一緒に考えていけるといいと思っている。時には嫌われる役割というものもあって、通園を勧奨する話をするときなどは、何で先生はそんなことを言うのと思われるときもある。しかし、お子さんにとって合わないところや、やっぱりしんどくなるのではないかと思われるところに、じゃ、頑張って行っておいでと送り出すよりは、1つの案として、こういうところもあるよという話もしながら、ベターを選んでほしいと思う。親子というところがやっぱり軸になっていると思うので、親子の療育を大事にしながら、日々それぞれの、保護者にとってもお子さん

にとってもいい支援をしていけたらいいなと思っている。

#### 〈討論の中での補足〉

保育園、幼稚園での巡回療育相談の場でも、保育園、幼稚園の先生からも、療育センターに行かせたいんですけど、どうしたらよいでしょうか、という相談も多いが、保護者によってそのタイミングは違うので、そこまでは育児の大変さをねぎらって、寄り添いしながら、きっかけを待つことが大事だと思う。そんなに聞いてくれる先生が行ってみたいらと言うんだったらちょっと行こうかなと思うときが来る人が多いのではないかと思う。長い目で見てタイミングを計っていくということと、療育関係の方に園に来てもらって、気軽に相談できる場もつくっていくことも大事だと思う。

付記：本稿は、2016年9月3日に開催された、愛知県立大学大学院人間発達学研究科・生涯発達研究所主催の「幼児のための療育セミナー」（発達障がいフォーラム）での報告をもとに、企画・運営を担当した山本理絵（教育福祉学部教授）がまとめた。